

本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2022 石井 剛



よりよく生きるためのスペースを 想像する

石井剛

（総合文化研究科、東アジア藝文書院）

これまでの授業を振り返りながら



東アジア藝文書院

第12回 王欽

共生を求めること・共生を堪えること

——魯迅を再読する

他者がノイズのような存在であるため、共生は耐えなければならないものとして紹介されていましたが、逆に共生を求めることは、他者に対して自分との共生を耐えるように強いることであると考えます。互いに迷惑をかけつ、かけられつ、といった関係こそ共生であると思います。またカフェのような静かな場所ではカップルの囁きがノイズのように感じられても、外に出てみれば、カップルのささやきよりもデシベルの数値としては大きい音がたくさん溢れているにもかかわらず、不快感を感じない場合が多いかと思います。一対一でいると不快に思うことも、百人の集団でいれば不快にならないこともありますし、その逆も往々にあります。共生は、さまざまあるケースで互いに不快に感じたりしながらも、その場では耐えて、その後は忘れることができるからこそ、成り立つものであると思います。

-
- ノイズは「わたし」と他者（阿金）の境界を不明瞭にして、他者をわたしの中に侵入させる。
 - 「わたし」は他者ではなく、他者は「わたし」ではない。では、「わたし」は他者と隔絶していると意識させるものは何か？

我々が自己に於て見る感覚的なものが、他として私に呼びかける
ことによって、私は私自身を知ることができるのである。
――西田幾多郎「私と汝」

上田閑照編『西田幾多郎哲学論集I』岩波文庫、1987年、324ページ

間柄に於て自他が分離しつゝ、その分離に於て自他を『我々』
として直接に理解してゐる
――和辻哲郎「倫理学」

宮川敬之『和辻哲郎――人格から間柄へ』、講談社、2008年、236ページ

「自己」、「我々」

なぜ「他者」でないのか？

アクチュアリティーや批評性を備えて生み出されたはずの「倫理学」が、生み出されたとともに、奇妙に貧相なモノローグに近づいてしまうのはなぜか。
――宮川敬之

宮川敬之『和辻哲郎――人格から間柄へ』、講談社、2008年、241ページ

-
- 他者と「わたし」の解きがたい関係を「わたし」の側において回収しようとすることはできるのか？
 - 他者の存在のいらだたしさは、そのような手つきを拒否しているからこそではないのか？
 - だとすれば、「間柄」的共生とは異なり、わたしたちが「すでに共生してしまっている」という事実を耐えること、つまり、他者のままである他者こそがわたしたちの存在の条件ではないか。

第2回 青山和佳

共生をめぐる小さな自伝的物語り

自我の中に他者が含まれているという感覚は、自分の中にアンコントロールな要素を持つことであり、そのアンコントロールの制御を諦めると、途端に向こうに飲み込まれてしまう可能性がある。一方で、そのアンコントロールなものの制御を諦めるということは、それをそのものとして受け入れることにもつながる。自分自身をそのまま受け入れることが大事、という言説は一つの大きな潮流としてあるような気がするが、そこにはそっくりこのまま、コントロールできない他者を受け入れる、という要素が含まれている。そうすると、ここにはもっとアンコントロールを許容する論理が必要であると感じた。だが、こういった論理であればこれを満たすことができるのか。

第8回 藤岡俊博

「他者」と共生する「私」とは誰か ——レヴィナスの思想を手がかりに

レヴィナスは存在することは存在するための場所を所有することだと解釈した。存在することで場所を必要とするなら、場所はすなわち土地であり、存在することは土地を必要とし、土地を奪うことである。土地を奪うことは時に争いをうみ、軋轢をうみ、怒りをうむ。「私」は中心にあり、「私」の世界に他者は存在する。場所や土地を所有する正当性を問い続けることは、すなわち自分中心の世界に他者を住まわせることの理由を問い続けることである。レヴィナスは共生の不可能性を前提としながらも、他者の場所を奪い、「殺人」を犯しながら自分が存在することを常に危惧し、自分が自分の場所に存在することの正当性を問わなければいけないという。他者と自分は相入れないのか。共生は不可能なのか。自分が存在することは他者を殺すことか。

-
- しかし、わたしたちは「殺してはいけない」ことを知っているだけではなく、実践している。
 - いま講義をしている「わたし」は教室に満ちる他者の他者性を本当に奪っているのだろうか？
 - むしろ、わたしは教室に集まってきている皆さんによってここに立つことを許されていると言うべきではないか。

ここまで考えて来ると我々はおのずから persona を連想せざるを得ない。この語はもと劇に用いられる面を意味した。それが転じて劇におけるそれぞれの役割を意味し、従って劇中の人物をさす言葉になる。〔中略〕しかるにこの用法は劇を離れて現実の生活にも通用する。人間生活におけるそれぞれの役割がペルソナである。我れ、汝、彼というのも第一、第二、第三のペルソナであり、地位、身分、資格等もそれぞれ社会におけるペルソナである。〔中略〕しかるに人は社会においておのおの彼自身の役目を持っている。己れ自身のペルソナにおいて行動するのは彼が己れのなすべきことをなすのである。従って他の人のなすべきことを代理する場合には、他の人のペルソナをつとめるということになる。そうなるとペルソナは行為の主体、権利の主体として、「人格」の意味にならざるを得ない。かくして「面」が「人格」となったのである。

――和辻哲郎「面とペルソナ」

第6回 中島隆博

共生とバイオポリティクス

私は他者との関係性の中での自分自身のあり方に苦慮する中で、不登校になった。学校は権力が作用し人々を規定してゆく機能を持っている。この一連の流れは、パブリックな権力から自分自身を守るというプライベートなあり方でありながら、しかし自分自身の生を十分に生かすという選択としてその当時の私が判断したわけではなかったように思える。現在の視点から見れば結果的に私を守るだけでなく、今後私自身の学びと生の発揮に向けた一時的な避難としてとらえられるものであったように思える。しかし、それを一時的な避難として終わらせ、私自身がより良い生のあり方へと向かう動きを生み出すことができたのは、まさにより良い生へ向かうことを支えてくれる方々との出会いであった。高校の先生が大きな転換点であったが、私の最も身近な家族の不断の支えを再発見することで、私がどのような存在で、どのようなあり方へと向かうべきなのかを模索するきっかけを与えてくれたように思える。そして、私に良い影響を与えた方々は、共通して私のパーソナルなあり方を認めていたからであるように感じる。

礼

パーソナルな実践の技法として

いくら自分探しをしたところで、単一の真の自己などというものは存在しない。自分自身の内にも、ほかの人の内にもない。心理学者であり哲学者であったウィリアム・ジェームズ（1842～1910）はかつて、“人は、自分を知る人の数とおなじだけの社会的自己をもつ”と書いた。驚くほど孔子的な意見だ。人にはそれぞれ無数の役割があり、役割同士が対立すること多いうえ、それをあやつる手綱さばきを教えてくれる規範もない。礼の実践だけが手綱さばきを身につける助けになる。

—マイケル・ピュエット

マイケル・ピュエット&クリスティン・グロス＝ロー 『ハーバードの人生が変わる東洋哲学』、ハヤカワ・ノンフィクション文庫、2018年、68ページ

自分を変える力にするためには、通常のあり方を離れることが、自分のさまざまな面を育てることに気づかなければならない。孔子のいう礼には変化させる力がある。少しのあいだわたしたちを別人にしてくれるからだ。礼はつかのまの代替現実をつくり出し、わたしたちはわずかに改変されたいつもの生活にもどされる。

—マイケル・ピュエット

祭如在。（祭ること在于がごとくす。）
——『論語』八佾

-
- ピュエットはさらに、「感情の修養」によって「他者に対するより相応しい反応の仕方を習得する」ことが必要だという。
 - 孔子における学問は礼の習得と実践に集約される。
 - 啓蒙とは理性の公的使用であるとカントは言った。啓蒙の役割には、さらに感情の修養による礼の実践であるという点が付け加えられるべきではないか。
 - 大学のキャンパスは礼の実践的な修練の場である。

第3回 星野太

いかにして共に生きるか

——「食べること」と「リズム」について

私は寂しがり屋である。それでいて、集団行動が苦手である。そんな私にとって、アトス山の修道院の生活は魅力的に思えた。しかし、「個人のリズムで暮らしつつ、他者と共生できるなんて、まさに夢のようだ……！」と嬉しがったのも束の間、それはユートピア（存在しない場所）でしかなかった。アトス山は、この世界では例外的な場所ではないのだ。では、私のような、寂しがり屋であり、かつ他者との共生も難しい人間は、どのように生きればよいのだろうか？アトス山をユートピアとして理想化するだけでなく、現実のものとする事はできないだろうか？私はコミュニティを作り観察することでアプローチしようと考えている。とりあえず、同じ志を持つ人を集めて同じ場所で寝食を共にし、アトス山のような共同体を作れるか実験してみる。例えば、アトス山は出入りが厳しく制限されているが、その共同体では制限をできる限り撤廃して、立ち入り制限がアトス山を可能にするファクターかどうかを検証する。



コモンズとしての の大学

儒家と墨家の是非の論争が生まれている。彼らは、自学派の是非で他学派の非とするものを是とし、他学派の是とするものを非として、論争を続けている。〔中略〕彼もまた一つの是非であり、此もまた一つの是非である。果たして彼の是はあるのだろうか。果たして彼の是はないのだろうか。彼と是とが対偶関係をもたないことを「道枢」という。「枢」において初めて円環の中心が得られ、尽きることなく応じている。是も尽きることなく、非も尽きることはないのである。

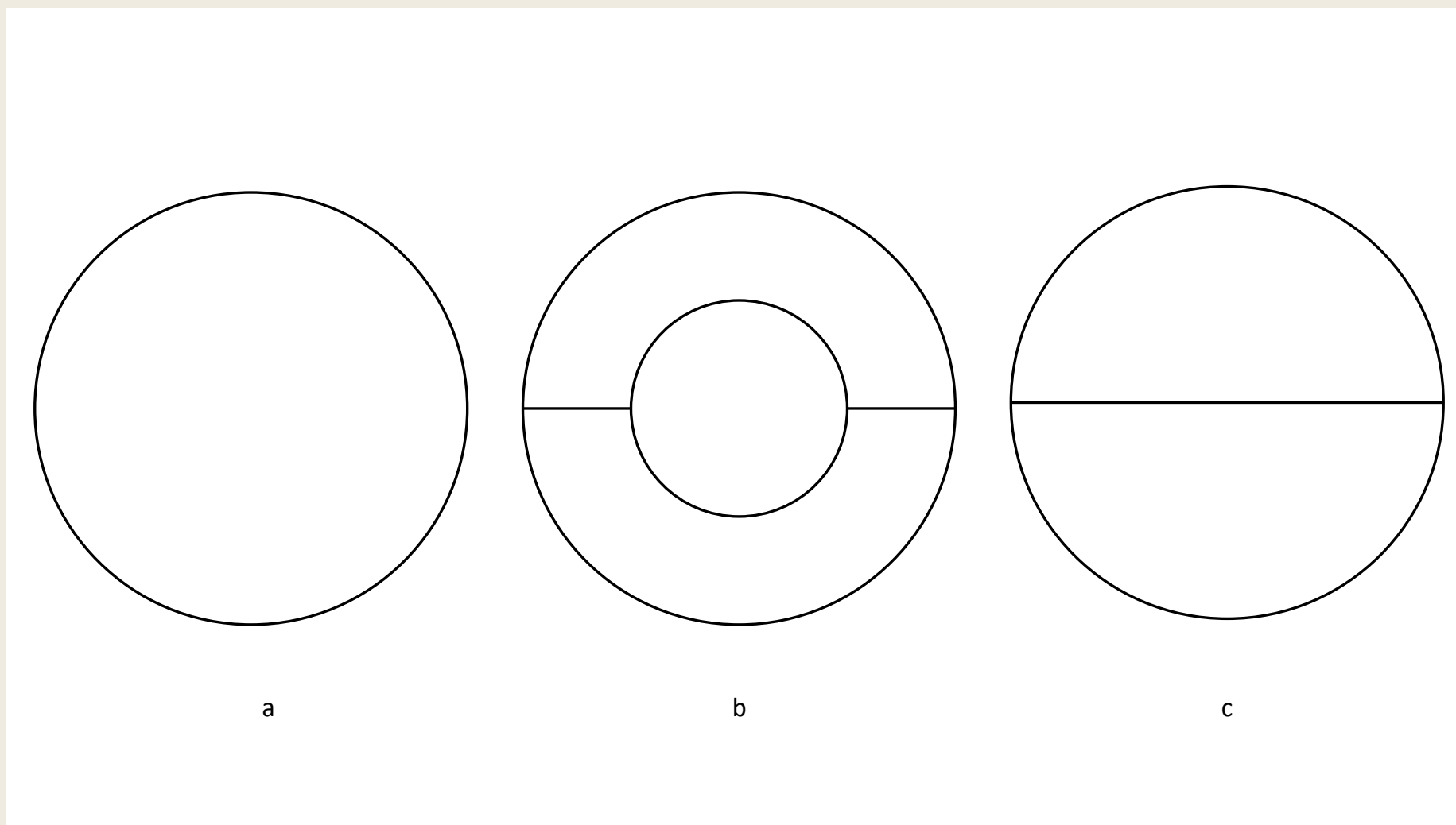
――『莊子』齊物論

池田知久『莊子全訳注』上、講談社学術文庫、2014年、138ページ（参照）

是非はともに変化するが道は存在し続ける。だから「道枢」と言っている。道の枢軸を捉えて円環の中に遊ぶのだ。「中」とは空のことだ。是非は尽きることなく相手を求めて反復する。それはあたかも循環しながら遊ぶようなものである。是非に振り回されることがないので、初めて尽きることなくその変化に応じることができるのだ。

——郭崇燾

三極構造モデル



山田慶児『混沌の海へ 中国的思考の構造』、朝日新聞社、1982年、296ページ

-
- 大学は三極構造における内部構造として、外部構造を支える諸力のバランスする「環中」として機能すべきである。
 - 大学における学問の「自由」と「独立」は諸力の平衡において得られるものであり、外部構造から離れたところに孤立して得られるものではない。
 - 内部構造を包摂する三極構造において、人間の世界は対立と矛盾を解消することなく並立したままで動態的な平衡を得る。

皆さんの感想から



東アジア藝文書院

第4回 呂植

Living in Harmony with Nature: Is It Possible And How?

現実には単純ではない。政府は自国（あるいは自分たち）の利益となるように動き、民衆も守るべきものが多くある。テーマが公共的であればあるほど、その正しさは揺らいでいく。環境問題を優先するためには、ある程度の強制力をもって行動する必要があるかもしれない。しかし、たとえどんなに正しくとも、人間の自由を暴力的に奪うことは倫理に反するだろう。一般的に許されない正しさもあるかもしれないが、各々がそれぞれの正しさを持っており、否定されるべきものはない。その正しさを受容しつつ、包括しうるような正しさを模索する営みを通じて初めて共生は可能になるのだと思う。今回の呂先生の事例では、地元の人々との対話の上に成り立っていたが、その過程は大きな困難があったと思うし、それを乗り越えたうえでの成果であると私は受け止めている。印象的だったのは、呂先生の「ポジティブになれるのは人々との出会いがあるからだ」という発言である。環境問題は深刻でありながら、人々は安易な誘導によっては往々にして動かない。だからこそ、それぞれの正しさと向き合い、人々が協力して環境問題を解決したいと願うような働きかけが求められる。教育や啓蒙は権力的なものではなく、対話的な働きかけによる学びの意味なのだと思う。

第5回 ユク・ホイ

Beyond the Organismic Metaphor, or Philosophy after Cybernetics

自分でロボットを生み出すプログラムはいまだ存在しない。しかし、時間がたてば意思を持つロボットが生み出されるのは時間の問題であろうと考える。また、人間が制御できなくなるとするのは、すでに始まっている。例えば人間はすぐに依存症になる。人間は自己認知を進化させた数少ない生き物であるが、その意識はあまりにもろい。アルゴリズムを適切に組めば、ウイルスのように人間の潜在意識に忍び込むのは容易である。一方、人間はまた機械的な存在である。人間の体内に侵入し、感染させ、変異しながら拡散していく、きわめて単純なアルゴリズムに従っているウイルスに混乱させられたCOVID-19のパンデミックはその事実を強く印象付けるものとなった。人間は、科学技術を手にして進化したと勘違いしていたと改めて気づかされたであろう。大量の情報を処理するだけの十分な知性を持たず、旧時代的な国家主義への回帰の動きがみられるのは、人間の持つ限界を示唆している。科学技術の発展は、理想的な知性への一直線上の動きとしてではなく、人間の限界と機械の可能性という、違った意味での二項対立的な概念を生み出している。

第7回 田中有紀

類を違える物と共に生きる世界： 中国思想から考える環境倫理

直接本人の利害に結びつきづらい環境倫理において人を動かすためには、ある程度社会心理学のようなものを考慮しなければならないと思います。これに関しては高校生の時に読んだ文章で印象に残っているものがあります。温暖化に関する意識調査をすると、その結果が聞き取り調査をした際の部屋の気温との相関性を持っていたというものです。すなわち、部屋の気温が高ければ人は温暖化には早急な対策が必要だと考え、部屋の気温が低ければ温暖化に対して楽観的になりがちであるということです。そんな小さな変化でこんなに大きな問題への意識が変わってしまうものなのかと衝撃を受けた記憶があります。

第9回 柳幹康

仏教から見た共生：私ひとりで幸せになれるのか？

白隠は、利他が他人を道具にすることであると認める。そして、道具にしてしまっているとしても、それは収奪するための手段としてではなく、利してもいるのだと説明する。こうした思想は私にひとつの小説を想起させた。『青くて痛くて脆い』（住野よる）という小説だ。この小説では、主人公の「僕」と大学で出会った友人である秋好との人間関係が主題となっている。「僕」は秋好との関係のなかで傷つき、秋好に復讐を試みる。「僕」は、自分が秋好によって「間に合わせ」の道具とされたことに対して怒りを吐き出したのだ。しかし、「僕」はそうした自身の発言が秋好を傷つけたことに後に気づき、やがて考えを改める。その中で、「僕」に傷を与えた「間に合わせ」の関係は、「必要とされること」「間を埋めること」としてポジティブな意味を持って捉え返されていく。その前提となっているのは、「人は人を間に合わせに使う」という避けられない事実を認めることであった。人が他者を道具としてしまう事実を一度認めただけで、それを肯定するという他者観がここにある。利他に先立ってある人間関係の根本的前提として「間に合わせ」の関係は意義深い。そこから利他や共生を考えることができるのではないだろうか。

第10回 張政遠 先住民族との共生

異文化としての差異を奪ってはならないが、差異の維持を理由に貧困に押し込めてもいけない。アイデンティティと経済は区別しがたい。観光コンテンツとしての「ニセモノ」に馴化させるべきではないが、断絶された異文化というブラックボックスに押し込めるべきでもない。このように見通しが否定的にしか語れないことは、「共生」という観点からは悲観すべきでも非建設的でもない。「異文化をどう扱うか」という客体化と対象操作の認識的前提を通じて、自文化が変容の契機を得ることになると同時に、「共生成co-becoming」の可能性が初めて開かれるようにも思える。

第11回 村上克尚

文学研究と「ポストクリティーク」

——批判は共生のための技術になり得ないのか？

これまで私は、共生とは、空間や時間を他者と共にすることだと考えていた。しかし、テキスト批評者とテキストの書き手、あるいはテキスト批評者とテキストの読み手はそのように共生しているのだろうか。それらの存在が共にしているのは時間でも空間でもなく、テキストそれ自体である。時間や空間ではなく、テキストを共にする他者という存在は全く新しい共生像である。それは、直接的には顕現しない他者との共生に対して私たちは「そこでは何を共にしているのか」と問うことが可能だということである。たとえば遠い国で戦争をしている人たちと私は何を共にしているのでしょうか。それは、地球という空間でしかないのだろうか。それとも、地球という単純な空間設定ではない何かを私たちは共にしていると言えるのだろうか。目の前にいない他者との間でも私たちは何かを共にしているのではないだろうか。私たちは価値観を共にしているわけではないし、思想を共にしなければならないわけでもない。そのような抽象的で形而上学的ともいえるものを共にすることの対象として掲げるのは、同一性の強制という危うさを抱えている。おそらく、私たちは目の前にいない他者とより具体的な何かを共にしている、あるいは共にし得るのではないだろうか。

“文の共同体”

大学と学問と社会の新しい協働関係に向けて

スライドで使用した写真について

1ページ ケルネル田圃（駒場野公園内）。1878年に設立された駒場農学校の実験圃。現在の東京大学駒場キャンパスはもともと駒場農学校から始まった東京帝国大学農学部のカンパスだった。

21ページ 駒場キャンパスコミュニケーションプラザ前。左奥はこの授業を行っている教室がある21KOMCEE East（教室は地下）。コミュニケーションプラザは2001年まで駒場寮があった。

33ページ 駒場キャンパス1号館。第一高等学校が本郷（現在の弥生キャンパス）から移転した1935年に内田祥三（工学部、のちに東京帝国大学総長）の設計によって建設。